

源氏物語の女性の服色

——「濃き」という語について——

松田香魚子

源氏物語に衣服の色をあらわす「濃」という語がしばしば出てくる。これが紫をさすのか、あるいは紅であるのかははっきりしない。古い注釈書も、その解釈はまちまちであり、又その根拠もあきらかでない。一応ここにそれらを表にしてみとめてみた。ただし、これは源氏物語中の主要な婦人達の服色にのみ限った。彼女達の性格と年齢、季節など何らかの関連が見られるのではないかと思つたからであるが、考えたような結果は得られなかった。表中「谷」は谷崎源氏、「大系」は日本古典文学大系、「全書」は日本古典全書。

「評釈」は玉上博士の源氏物語評釈をさす。

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	抄名	年令	人物	濃き (綾)
花鳥説可然紫なるなり	こきとはこうちきの事なり 　こき紫にそめたるべし 河海には紅のこきとするされたりいかかが見え侍り	き与	空蝉 一、三二〇		空蝉	夏

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	卷名	年令	人物	濃き	評釈	全書	大系	谷	蝦江入楚
紅なり	ときかいねりは紅のかいねりなり		玉鬘 五、一四一		花散里	(かいねり) 春	紫	濃紫の綾織物	濃い紅色	濃い紫の綾のひとつへかさね	河海抄、花鳥余情、弄花花鳥説をとる 三四家の抄、 花鳥説をとる 箋、花鳥説をとる

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	卷名	年令	人物	濃き	評釈	全書	大系	谷	蝦江入楚
紫なり、河海説あやまれり	ときと云はこきむらさきなり、今の世にふしかねにて そむるはまねびものなり、こき紫のうちたるはひかり 色ありてうつくしきなり、それをしろきにかさねたり は、けたかく見ゆへきなり、河海にこうはいのうすき ぬといへる、あやまれるかと、おぼえたり	うき文のときは紅梅のうすきぬなり	玉鬘 五、一四二	二七	明石	(つややかなる) 春	とても濃い紅の	濃い赤色の	たいそう紅色の濃い	たいそう濃い極練	三西家の抄、花鳥説をとる

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	巻名	年令	人物	濃き	評釈	全書	大系	谷	浜江入楚
			総角 一〇、三九九	二四	中の宮	(御衣の) 秋	紫	濃赤色の	紫色	濃い紫の	河海抄、三西家の抄、こきは紫か、河海あやまれり、花鳥余情、河海に紅梅のうすきめといへる、あやまれりよし、花鳥にはの給へり

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	巻名	年令	人物	濃き	評釈	全書	大系	谷	浜江入楚
			宿木 一一、二九四	二一	浮舟	(桂に) 夏	紅の濃い色		紅の	濃い紫	紫にもおほくいへり、これは紅なるへし

源氏細流抄	花鳥余情	河油抄	卷名	年令	人物	褌き	評釈	全書	大系	谷	岷江入楚
	濃打のきぬなり		浮舟 一二、二一六	二一	浮舟	(衣に) 春	濃い紅色の	濃い紅の桂	濃い紅色の	濃い桂に	浮舟の衣裳なり、こきは紅なり
紫のきぬなり											

評釈	全書	大系	谷	岷江入楚
濃い紫の衣に		紫	濃い紫のきぬに	花鳥余情、濃打のきぬなり、三西家の抄、こききぬは紫のきぬなり、箋、紅のきぬなり云々、私、紫然べし